

# 西藏文明の起原及現狀

河 口 慧 海

本席當學會の御紹介で一場の講話を致すことになりました所が、歴々の御方が御參會下されまして有難うございます。私の題は西藏文明の起原及其現狀といふ大分大きな題で、是れはもう少し廣く照らして研究をした上で話をすれば長く幾回かに講演することが出来るやうな題であります。唯々一回二時間三時間喋りました所がそれで十分に盡すと云ふことは出来ないであります。併し乍ら唯今御紹介あつた如く、私の見て參りました所を土臺として話をしまして尋いで諸君の御質問に依つて話を申し上げたいと思ひます。

元來西藏と云ふ國に文明が有つたか無かつたか、今文明を有つて居るかと云ふことすら疑問であります。見様に依つては西藏人は先づ野蠻人とまで云へなくつても半開人であるから眞の文明と云ふものは無からうと解釋が出来るのであります。即ち近頃の如く汽車電車或は電話電信と云ふやうな便利なものが澤山出來て生活が段々立派になり暮らしよくなつたと云ふ様な點を主として申しますれば、さう云ふ文明は西藏には先づ無いと云つてもよい。けれども、所謂文明とは、人間の道徳が發達し次で禮儀な

どが整ふて居るやうなことも亦文明と云へるであらうと思ふ。禮儀は文明の精華であると云ふ人もありまして、さう云ふ精神的文明の方から觀れば西藏は立派な文明を有つて居るといふことが出来るのであります。先づ西藏人の文明と云ふものは多くさう云ふ方面から觀なければなりません。即ち私は今西藏人の文明と云ふものは精神的に發達して居ると云ふことを主として其起原を一つ尋ねやうと思ふのであります。而して其西藏文明の起原を説明するに際りましては初に地理の説明を少しく致して置く都合が好い。勿論御承知の方もありませんけれども、私の實見致しました處に依つて地理の話を致したいと思います。

此處に掲げてありますのは印度と西藏の地圖であります。中程からして南の方が印度帝國で、北の方は西藏國であります。是れは印度を主として描いた圖であるから西藏の全體が表はれて居りませぬけれども、北の方に崑崙山脈がありまして此邊まで西藏は續いて居るのであります。南の方にあるのがヒマラヤ山脈であつて、東西の長さ凡そ一千八百哩、其幅が處に依て廣狹がありますけれども南から北にブラマプトラ河まで行く間が凡そ二百哩あります西藏の東には雲南省及四川省があつて此方面に峻嶒な山脈がある。北の方には彼名高い崑崙山脈がある。西にはカラコラム山脈がある。斯う云ふ風で四面みな世界的高山を以て圍まれて居る。中央にも山が澤山であつて。西藏は高原國と云はれて居るけれども其實高山國である。中に這入つても雪の山が彼方此方に澤山ある。其間の平地はつまり谷間であつて、京都

の山の間谷間位の廣さのある所が一番廣い所で、大抵は山を越えて向ふの谷に下ると云ふ位になつて居るのです。其谷間に在る平地が東南の方に來るに隨つて低くなつて其間にブラマプトラ河が流れて居る。ブラマプトラ河の落ちて來る邊が一番低い處であるが、其低い處でも海拔八千呎である。それから拉薩の市街の在る地は餘程低い方であるが、それでも一萬二千呎それからシカツエと云ふ第二の都會がありまして、此シカツエの邊が一萬三千呎ある。さうして高い方では平地の様な處でも一萬五千呎から一萬六千呎位はある。此國の西部に二つの湖水があります。一つはマナサルワ湖といひ、一つはラカスタールといふ。マナサルワは印度語であつて、實は西藏語でマバム、ユムツオと云つて居る。日本の經典には阿耨達池アヌタダとなつて居りますが、これは訛音で實はアナヅタヅタ、譯して無熱惱池となるのです。此湖水の近處は西藏の昔の文明に關係を有つから名を申上げて置きます。而して此邊が一萬五千五百呎ある。是れが世界中一番高い湖水と稱されて居るのであります。斯う云ふ風に、平地と云つても八千呎以上一萬六千呎の平地でありまして、山と云へば二萬九千呎迄に至るものがある。ヒマラヤ山の如きは大抵二萬呎以上の山を以て連なつて居る。折々雪の切間があつて一萬六千五百呎位の谷間を通つて向ふへ行ける處があると云ふ有様です。何うしても西藏に入るには一萬六千五百呎以下の處を通つて行く譯には參らないのであります。東の方から行けば高い處が餘程少なくて路は樂でありますが、併し路は樂であるが盜賊が多い。カムからアムドと云ふ地方は強盜の本場である。北から來ても東から來ても此地

を通らなければならぬが、なか／＼むづかしい。

私は明治三十年六月に日本を立ちましたが、其翌年十二月に東本願寺派の僧で能海寛氏と寺本婉雅氏との兩人が西蔵を指して行つた。支那を経て行きましたが、リタンと云ふ處まで行つて止められてチントまで後戻りして其處から寺本氏は日本へ歸られ、能海氏は再び一人で西蔵へ入られた。其時は路を變へて雲南の方から入つた。それが丁度今から十五年程前であります。其後杳として消息がない。私が三十六年に歸つて参りました。三十七年に再び西蔵へ行くと云ふことが定まつた時分に、其能海寛氏の細君がわざ／＼石見國から東京へ出て來られて、私の宅へ參つて、能海氏の寫眞を見せて、斯う云ふ人を貴下は御覽にならなかつたかと云つて尋ねられた。勿論澤山の人に會つて居るけれども、どうもさう云ふ人を見て話した覺はないと申しますと。彼細君は頼みました、今度再び行かれると云ふとであるから何うか此寫眞を持つて行つて搜して呉れと言はれました、私は其寫眞を携へて行つていろ／＼の人に尋ねました。二度目に行つた時には私は日本人と云ふことを初から標榜して這入つたのであるから遠慮會釋はない。殊に西蔵政府のお客さんとして取扱はれて非常に歓迎されましたから、政府の人或は其地方の行商とか又は巡禮者とか、いろ／＼の人に其寫眞を見せて聞きましたけれども、どうも斯う云ふ人に會つた覺はないと答へるばかりで遂に其行方が分らない。或は此邊は強盜の多い處であるから強盜の爲に殺されたか、或は雪の爲に埋められたか、何うなつたか分りませぬけれども、兎に角此十五年間と云ふ

ものは全く行方不明である。氣の毒なことであるけれども、其お方は遂に歿くなつてしまつた。さう云ふ譯でありまして此方面から行くのは路はやさしいけれども強盜の困難が非常に多い。

それから北の方から行きますには即ち蒙古から行くのでありますが、蒙古から行けば沙漠を越えなければならぬ。沙漠を越えて西藏國內に入つて、青海湖の處まで漸く出て、それから先がまだ澤山あるのです。青海湖から拉薩まで着くには二箇月程を要する。西藏の旅行と云ふものはなかく日本内地の旅行の様には埒らない。空氣は稀薄であるし、馬とか或は犛牛と云ふものを連れて居るから、其馬なり犛牛なりに草を呉れなければならぬ、其草は何處にも賣つて居るのではない、天然に生えて居るのを喰はせなければならぬから、何うしても朝早く立つて午後二時頃までしか行くことは出来ない。二時頃になれば馬に草を與へる爲に、或は犛牛に草を與へる爲に泊らなければならぬ。であるから旅行が埒らない。さうして此邊を通つて行くには大勢一緒になつて、百人百五十人の人が一團となつて行けば危険は少ないが、それでもどうかすると強盜の方でも矢張百人とか百五十人とか隊を組んで來て互に戦争をすることがある。さうして負ければすつかり取られて了ふ。其代り向ふを敗つて了へば、向ふの部落を滅ぼしてすつかり取つて了ふことが出来る。まるで戦争しつゝ行くやうな状態であります。西の方から行くと比較的樂なんです。強盜などは餘り居らない。けれども一萬八千呎から九千呎までの山を越えなければならぬ。

山の高い處を越えるのは冬などは非常に困難ですが、比較的やさしいのは何處かと云ふと朶士林ゲイジンの下  
の溪から東北方へ向つて行く路です。それは僅に海拔一萬六千五百呎の山を四箇處越えれば拉薩に入る  
ことが出来るのでありますから、是れが非常にやさしい路で通商交路になつて居ります。所が私共が行  
くにはさう云ふやさしい路を通ることが出来ない。地圖で御覽になつても分る通りに、高山を以て天然  
に國を鎖して居るのみならず、政治的に國を鎖して關所が設けてあつたから這入ることが出来なかつ  
た。故に私が第一回西蔵進入の時は已むことを得ず、關所の無い處を通る爲に、朶士林から一旦西に行  
き、ネパール國に入つた、彼國の首府から東北の方へ行けば非常に近いのですが、其處から東北へ行く  
ことは關門の堅鎖があつて出来なかつたので。又西北方へ進んでカイラス雪峯を指して行つた。さうし  
ないと安全に這入ることが出来なかつたのである。彼國に這入つても疑はれる種なくなる様に初はさ  
う云ふ行路を取つたのであります。所が二度目には朶士林からシッキム國を越えて直接に北へ抜けてシ  
カツエーに行つて、シカツエーから拉薩に行つたのであるから一番近い道を通つたのであります。今度  
の入藏の時は何處から這入つても、西蔵へ這入りさへすればお客様にして大切にしてお呉れると云ふこと  
が分つて居つたのであります。唯いけないのは朶士林からシッキム國まで這入る間が非常にやかまし  
いのです。シッキム國は英國の管轄内であつて英國政府が之を鎖して居る。政府の旅行券を持つた者で  
なければ誰も外國人は入れることはならぬと云ふことになつて居る。所が西蔵に行くと云つたら旅行券

は絶対に呉れない。どんな用事があらうと、自分の國の人にでも遣らぬと云ふのです。それは英國政府としては無理もない處がある。マア口實と云ふか無理もないと云ふか、兎に角露西亞と英國と約束をしてある。英國から西藏には外國人も入れない自分の國の者も入れない代りに、露西亞からも入れてはいかぬと、斯う云ふ約束がしてあるから英國政府は此シッキム國を塞ぐ理由がある。そこで關所を設けてある。其關所もなか／＼容易に破ることの出来ない様に大きな谷川の橋を越えた處に設けてある。夜分は其橋の真中で見張つて居ると云ふやうな次第で、なか／＼通れない。けれども幸にして其關所をば抜けて私共は行つたのでありますが、それでも矢張やさしい道路を通ることが出来なかつた。やさしい道路を行けば通商行路になつて居る。それはチユンピー溪路である。所が私共の通りましたのはメトラと云ふ海拔一萬八千呎の道です。其道は冬期は殆ど人が通らない。何故かと云ふと、あまり高いので雪嵐の爲に人が殺されるからです、メトラは一名人殺シ坂とも云つて居る位で、さう云ふ危険があるから人が通らない。此道から行けば必ず這入れる。何故ならば此道は關所が比較的緩いからです。兎に角這入るのが目的でありましたから、その道を通りました。丁度一昨年即ち大正二年の十二月二十日に印度を出て、此メトラを通つたのが大正三年の一月七日から十一日迄の間であります。

先づ何處から這入りましても斯の如く困難な國であります。さうして高いことは前申しました通り非常に高い。世界の高山國である。然るに初から斯様に高い土地であつたか何うかと云ふことは、それは

疑問に屬するのであります。初はもつと低い土地であつたらしい低いも低い、極く低かつたらしい。其證據には、西蔵の山からして私はいろ／＼の化石を持つて歸つて來ましたが、其れが海に棲んで居る動物の化石であつて腕足類が最も多い。腕足類の動物は十萬年乃至十五萬年前に棲んで居つたものらしいが、其腕足類の居つた時分には此邊は海であつて、段々上がつて來たものと見える。印度全體も或は其時分には海であつたかも知れぬが、西蔵が海であつたと云ふことは其等の化石類を見ても分ります。又珊瑚礁のやうなものもあつて之も持つて歸りました。西蔵新派佛教の最靈地ガンデン山の溪には大螺貝の化石が岩に着いて居る兎に角海であつたと云ふことは確であります。それが段々上へ上がつて來て、ヒマラヤ山と云ふやうな世界の高山が出來た。或學者の説に依ると三萬年前にヒマラヤ山は出來たと云ひますが、果して然うであるか何うであるかと云ふことは確定することが出來ない。けれども、兎に角十四五萬年も前に此處が海であつたと云ふことは確であります。

其後人間が棲むやうになつてから、少くとも今より八千年以前には此マナサル湖の邊に非常な文明があつたらしい。それは即ちキラタ種族の文明です。キラタと云ふ種族は非常に大きい種族であつて印度全體に亘つて居つた。バルマの方にも居つた。錫蘭にも來て居つた。キラタと云ふのは總稱であつて、キラタの中にいろ／＼の種族があるのです。藥叉ヤクシャと云ふのもあり、或は羅刹鬼ラクシャスと云つて、人を食ふやうな恐ろしい者も居つたし、又乾達婆カランダと云つて、花の香を食ふといふ高尚な天人の様な人間も居つた。其時



分には既に澤山人間が棲んで居つた。さうして未だ北の方からアリアン種族は餘り出て來なかつたのであつた。キラタ種族は印度のアポリジニーと云つて宜いので所謂土人です。其印度の土人を幾たびか征服したアリアンの一種のドラビアンと云ふのがあつて、それが土人を征服して、其後アリアン人が澤山出て來た。さうして印度征服に掛かつた。それがブラフマ神に屬する一族です。所がマナサルワ湖にカイラスと云ふ山があつて、此カイラスと云ふ山が其時代には一番名高い處であつた。時代を明かに定めることは難かしいのでありますけれども、兎に角印度で書いた所の吠陀とか「ラーマ、ヤナ」とか云ふものに依つて時代を定めて行きますと大略八千年位前に當ります。吠陀が初に書かれたのは七八千年前であらうと云ふ學者の説がある。もつと新しい説を立てる人があるけれども、マア七八千年前であると思はれる。其時分にカイラス雪峯ギリと云ふ處は自在天マヘスワラ即ち濕婆シヅの都であつて、自在天マヘスワラと云ふ英雄がキラタ種族を支配して居つた。彼を現今でもキラタの神とも云ふ。其自在天の下に四天王と云ふものがあつた。即ち東の方は持國天王、南の方は增長天王、西の方は廣目天王、北の方は毘沙門天王と云ひ、此四天王がカイラスギリーの四隅を護つて居つた。其時分にカイラスギリーを呼んで蘇迷盧スミルと云つた。スメルは俗に須彌山のことです。さうすると須彌山がヒマラヤ山に當る譯です。世界のことを須彌と云ふのであるが、何故そんな處へ行つたかと云ふと、どうも印度の須彌説と云ふものは七十二三説もありまして、いろいろ發達して變はつて居るのであります。初の須彌説に依るとつまりヒマラヤ山が須彌

山であつて、須彌山の頂上がカイラスギリである。なぜ分るか云ふと、須彌説には須彌の四洲と云ふものがある。東はビデーバ、南はセンブシユ、西はグヤーニ(グーダンナ)、北はクルシユと云ふ風、四つの洲がある。而して南にある所の洲は其土地の形が三角であると云ふ。であるから印度より外にない。大さも大抵印度と合つて居る。さうして、ジャンブ、ヅイバと云ふのは昔は印度であつた。それから東の方はビデーバと云つたが、ビデーバは海の中に在る。體を離れて居る。即ち大體の大きな體から離れて東の方に國がある。それは日本か亞米利加であつたでせう。西の方はグーダンナと云ふ。これは牛を尊んで飼ふ處であると云ふから歐羅巴と見ればよい。北はクルシユと云ふ。クルシユはウツタラ、クルと云つて、崑崙山の北の方の人民は皆クル洲の人と云はれた。斯う云ふ風に須彌の四洲と云ふものを立て、居つたのであります。併ながら印度人は自分の住んで居るセンブシユに就いては明かな知識を有つて居つて三角であるとか云つて能く説明が出来て居つたけれども、他に對しては地理的の考が明かでなかつた。唯々其方に旅行して來た人とか或は傳説に依て書くのでありまして、其時分に地理學の觀念も明かに有つて居らなかつた。だからして國の形と云ふものも餘り合つて居らない。

先づ斯う云ふ風にカイラスギリが一番高い處であつて、其四隅を護つて居るのが四天王である。斯う云ふことが分つて來ますと大變面白いことになりました、元來須彌山の頂上をカイラーサと云つて居るのは何う云ふことかと云ふと、カイラは樂みと云ふこと、アーサは處と云ふことで、即ち樂みの處

の山と云ふのです。スメールと云ふ山は譯して妙高山と書いてある。此妙高山の頂上が樂處である。斯う云ふことは印度ばかりで云ふことでなくして支那に傳はつて居る所の經文にも載つて居る。印度で出來た一番古い詩集に「ラーマヤナ」と云ふのがあります。大きなもので、羅摩と云ふ英雄の事を詠じてある。所が此羅摩が自分の妃であるシーターを楞迦(錫蘭)の王様のラーバナ「羅婆那」(此王は楞迦經中には如來に説法を請ふた主となつて居る)と云ふのに盜まれてしまつた。初は誰に盜まれたか分らないので四方へ兵を派して搜させた。其時羅摩が諸の大將にシーターを搜がさせる爲めに一々に何處へ行け何處へ行けと命令して居る。其事の起つた處は阿踰闍であるが、羅摩は其命令する時分に其大將のスクリツバに命じて曰ふには、汝の光は赫々たるカイラスギリに達せよ、其山は毘沙門天の支配する處にして黄金の宮殿ありと云つて説明して居る。既に「ラーマヤナ」の時代にもこの位はつきり分つて居つた。又ラーマヤナと云ふのは印度人に言はせると何萬年前に出來た所の詩であると言ふが、今の學者は先づ六七千年前のものであらうと言ふ。もつと新しいものと云ふ説を立てる人もありますが、兎に角六七千年前のものと見ますと、其時分に既にカイラスギリは毘沙門天が支配して其處に非常な御殿があると云ふことが分つて居る。この毘沙門天と云ふのは羅婆那と兄弟です。羅婆那が兄で毘沙門天は弟です。兎に角毘沙門天の住んで居る處は非常に立派なものであると云ふことを説いて居る。又此時分には奇態なことがあります、羅婆那と云ふ王は空を飛ぶことを知つて居つた。それは神通力に依つて飛ん

だのではない、飛行機で飛んだ。その事はラーマヤナに空を飛ぶ道具として誌してある、妙な事であると思つて、今の飛行機が出来て来るまで吾々には何であるか分らなかつた。飛行機が出来てからは成程飛行機であつたと云ふことが分つた。羅摩<sup>ラマ</sup>は羅婆那<sup>ラバナ</sup>を征伐してからそれを使用して自分の后と一緒に錫蘭からアヨッデヤ市に歸つて來た。これが昔であれば只小説的に面白く書いたのであるとしか思はなかつた位のことだ。ラーマヤナに載つて居たのである、ラーマヤナと云ふのは詩ではあるけれども、歴史の事を書いてあるものとして大分知られて居る次第であります。

所で又カイラス山脈は其後になつてもなか／＼言傳が遺つて居つて偉い處と云ふことが分つて居る。ラーマヤナの時分には其處に澤山の人が行つたりして居つたが、最早マハーバーラタの時代には餘り人が行かなかつた。それはマハーバーラタに書いてあることに依つて分る。マハーバーラタと云ふのは印度人の説に依ると、今より四千五百年或は五千年前に出來たものと云ふことになつて居る。西洋の學者の研究では三千年とか或は二千七百年とか、或は二千五百年と云ふやうに段々年數を縮めて居りますけれども、どれが正しいのか分らない。西洋人はいろ／＼言つて居るけれども、マハーバーラタの中には極く新しい事も書いてある。大きな書物である所へ後に澤山外の話を加へたのである、故に其中に新しい話があると云つても全體が皆新しいとは云へない。古い時代に書いたものであるが後世面白い話があるに隨つて段々其中に加へたものです。丁度一つのエンサイクロペヂヤの様なものであつて、種々な

る話が這入つて居る。哲學上の話も這入つて居れば、ナラ王とダマヤンチーと云ふ芝居の様な話も這入つて居る。其中心になつて居る話はバーンダヴと云ふ五人の兄弟が其一族のコーラヴと云ふのと戦争をした話である。是れが世界的大戦争であると云つて居る。印度人は日露戦争位は此マハーバーラタに較べると何でもないと云つて居る。此話を詳しくして居ると長くなりますし又本問題にも關係ありませんから大體に致して置きますが、此バーンダヴの五人の兄弟は戦争に勝ちましたけれども、自分の一族をみな殺した。澤山の人を殺したに由つて非常に懺悔心が起つた。此頃の言葉で言へば無常を感じたのです。そこで此印度に居つては面白くないからと云ふので五人の兄弟と一人の女房と連立つて天國へ指して行かうと云ふことになつた。是れが面白いのです。このバーンダヴと云ふのは五人の兄弟で一人の女房を有つて居る。丁度これは西藏に行はれて居る風俗です。西藏は御承知の通り一妻多夫である。それから南印度の山中に住んで居る土人がやはり一妻多夫である。所が此マハーバーラタの主人公になつて居る英雄のバーンダヴと云ふのが五人の兄弟で一人の女房を有つて居る。其等の者が連立つて天國へ指して行くことになつた。天國と云ふのはカイラス山である。カイラス山には其時分にアラカール城と云ふ都があつて其處に出懸けた。所が途中で四人の兄弟と女房とが死んでしまつて、一番の兄のジュディステールと云ふのが一人残つた。此ジュディステールが最も道德的人であるからカイラス山に達することが出来たと云ふことになつて居る。

然るに西蔵の王様は天から來たと西蔵人一般は思つて居るけれども、其歴史に依ると實は印度の偉い人でリツチャビー族の王であつたと誌してある。其印度の偉い人と云ふのをジュデステールにすると大變によく合ふのです。西蔵に一番初の王様が出て來た時に、貴下は何處から來たかと尋ねたら、あの山の上から來たと云ふとを、言葉は分らないから指さし示した。さうして西蔵人は自分達が非常にきたない顔であつて、文明の進んだ印度の立派な人間を見た時分に非常に驚いた、是れは神の國から來たのであらう、空の方から來たと云ふから天國の人であらうと云ふので直ちに之を王様に立てた。斯う云ふことが西蔵の歴史に載つて居る。此王様になつた人から風俗が傳はつて西蔵では何人兄弟があつても一人の女房にすることになつたのであらう、併し其風俗は或は西蔵に於て元からあつたかも知れない。元からあつたかと思はれるのは、印度の南に居る種族も北に居る種族も同じキラタの一族であつて此一族がアリアン人種の侵入の爲に北と南に分れたのであるが、其南に行つて居る種族の風俗が一妻多夫であつて、而して西蔵の風俗も亦一妻多夫であるからして、或は同じ風俗を前から有つて居つたかも知れないのであります。兎に角西蔵に一妻多夫の風俗があつて、其れと同じ風俗が印度の南の方にもあると云ふことは事實であります。それであるからマハーバータの時代が今から五千年前としますれば、其時代にはカイラス山と云ふものは餘程神話的になつてしまつて明かに分らなかつた、ラーマヤナの時代には、即ち七八千年前には大變よく分つて居つた。羅摩ラマの王様の妃が盜まれて行つたのは此邊ではないか

と云つて兵を派して居る所を見ても明に分るのであります。

それからもつと後の時代になるとメーガヅータと云ふ名高い詩があります。これはカーリグーサと云ふ詩人が書いたので千五百年程前のものでありまして、此時代になると全くカイラス山と云ふものは神話的になつて居ります。メーガヅータと云ふのは譯すると雲の使者と云ふことである。カイラス山の毘沙門天王の家臣のヤクシヤが何か落度があつて印度へ一年間流罪に遣はされた。さうして印度に行つて居る内に雨期になつて雲が出て來た。印度では雨期が來なければ餘り雨が降らない。陰曆五月の十五日から九月十五日までの四ヶ月間が雨期であります、此雨期に至つて雲が夜叉の前に出て來た。其雲に對して夜叉は自分の女房でカイラス山に居るものに傳言せんことを頼んだ、此詩の上篇は其雲が旅行すべき路程を説いたもので下篇はカイラス山及其妻の住居の有様並に其妻に云ふべき事柄を説明して居る、其言語は洵に情の深い言表し方をして居る。それが雲の使者と云ふ名高い詩である。之に依つて見るとカイラスの山と云ふものは、まるで神様の國になつて了つて、全く神話になつて居る。

斯う云ふ風に印度の歴史及西藏の事に就いて見ると、七八千年の昔に於て此處に文明が存在した。其文明が何う云ふ關係を西藏と印度に有つて居るかと云ふと非常に其關係は深いのであります。初は大自在天がカイラス山に居てキラタ族を司つて居つた其大自在天の遺方は多くは宗教的で半僧半俗の祕密法である。祕密で何か事をする。それであるから大自在天と云ふ神様は印度のアポリジニーの神様である。

ブラフマは婆羅門族の神様である。それから毘紐天は遊牧民の神様である。斯う云ふに三つが實は異種族の神様であつた。それであるから、何うかすると大自在天とブラハマの方とが喧嘩をすることがある、或はビシュヌの方と仲違ひになると云ふやうなことがある。それであるから皆種族の異つて居つた所の王様の偉い者であると思ないと、どうも關係が分らない。兎に角大自在天が支配して居つた、其文明の遺風と云ふものは吠陀の中に多くはマントラになつて現れて居る。マントラと云ふのは眞言です。其等が總て印度の方で祕密教となつて遺つて居る。其祕密教がまた西蔵の方では何うなつて遺つて居るか云ふと、極く文明が退歩してボン教と云ふものになつて遺つて居た。それが一つの形である。所が印度に於て此大自在天(マハーデーバ)の祕密教と佛教の祕密教とが合して大分悪い形の祕密教が出来た。其祕密教が西蔵に這入つて西蔵に於て盛になつた。であるから祕密教と云ふものは初に西蔵から出て行つた、是れを現今の印度祕密教徒は「チナ、アチャールヤ」支那師傳と云ふて居る、此祕密教が佛教に入て形が變はつて、さうして佛教を理に依つて高尚なものになつて復び西蔵に這入つて行つたことになる。此等の事を詳しく申し上げますと、西蔵の書物及印度の書物からいろいろ引出して説明しなければならぬようになりますが、兎に角西蔵の文明と云ふものは非常に古いものであつて、而してアリアン種族の文明ではなく土人の文明であつた。其土人はキラタと云ふ種族であつた。キラタ種族の中には印度の東部バルマにも行つて居る。であるからバルマ人と云ふものが亦よく西蔵人に似て居る。斯う云ふ點から考へると、



つまり西藏人はアリアン人種の這入らない前の文明を有つて居つた。其文明は西藏では退歩して居つたが、印度へ行つて印度の方で非常に發達して高尚なものになつて再び西藏に復つて行つて西藏で今行はれて居るのであると、斯う云ふ結論になるのであります。

是れで先づ西藏文明の起原と云ふものゝ大略を説いた譯でありまして、次に其現状に就いて少くお話を致したいと思ひます。

西藏の文明の現状は佛教的文明と云つて差支ない様なものであります。併し其佛教が純粹の佛教でない。佛教と云ふ名と佛教と云ふ教理とに依つて喇嘛教が出來て居つて其喇嘛教的文明であると云ふのが適當であらうと思ひます。現代の西藏人の總べては何んな思想に依つて生きて居るかといふと、西藏人自身は現世の此生活をして行く上に於ていろゝの幸福を得たいと云ふことを望むの念が非常に熾であつて、何よりも一番大切にして居るものは喇嘛教であります。西藏人から喇嘛教を取去つてしまつたら彼等は何の文明もない全くの野蠻人である。そこで喇嘛教と云ふものを觀察するのが現代の西藏人の文明を観る一番近道であらうと思ひます。先づ佛教と喇嘛と云ふものゝ異ふ點を初にお話致します。

佛教は御承知の通り釋迦如來が初めて御説きになりました。其教が印度に起つて諸國に傳はつたことになつて居ります。佛教と申しましても其中に大乘教もあれば小乗教もありますけれども、一口に先づ佛教とはどんなものかと言ひますと、解脱を得る所の方法である。即ち自由を得るのです。其自由と云ふ

のは精神的自由である。故に精神上何等の苦痛も何等の怖れも何等の障礙もない立派なものを得る地位に到達することを教へるのが佛教である。それに到達するに種々なる道がある。其道は必ず正しいものでなければならぬ、正しくないものは佛教ではない。よく世間では、目的さへ達すれば方法は何うでも宜いといふことを言ふが、是れは佛教では絶対的に許さない所のものである。

佛教に於て——眞言宗でいへば是れより高尚なものはないとせられて居る所の大日經に方便即究竟といふ語があります。究竟と云ふのは即ち佛になつた處である。精神的自由を得た境界を云ふ。方便とは其れに達する所の一切の方法を總稱するのである。而して方法其儘が即ち佛である。それであるから方法が佛でなかつたら眞の方便と云ふとは出来ぬ。方法其ものが佛の行ふ所の佛行である。御承知の如く即と云ふ字は「其まゝ」と云ふことです。乃ち方便即究竟と云ふことが佛教の教の成立ちを表はして居ります。そこで佛教に戒法と云ふことがあります。戒法とは戒める所の法である、何か一つの事を是れはしてはならぬぞと戒める規則であつて、其規則を別々解脱と名づけて居る。別々解脱は波羅提木叉フラナモクシヤといふ語の翻譯です。一つ一つに解脱して行くといふ意味です。例へば佛教には酒を飲むなと云ふ戒がある、此戒を守れば酒を飲まないと云ふことに因つて其人は酒を飲む所の一切の害から一つ解脱して居るのです。嘘を吐いてはならぬ、常に眞實を言へと云ふ戒がある。此戒を守れば嘘を吐いて起る所の總ての困難から解脱して居るのです。最も佛教に於て肝腎な戒としてある所の不殺生戒と云ふものがある。即ち

動物の命を取らない。命を取らぬ爲に動物に怖れを與へない。怖れを與へないからして自分にも怖れがなくなつて來る。因果と云ふものは妙なものでありまして、肉を食ふ人は山などへ行くと何だか厭な氣がする。私は肉を食はないから山へ行つても寂しい處へ行つても、あまり寂しい怖いと云ふ感じが起らない。つまり動物に怖れの觀念を與へないと自分も怖れないやうに解脱を得て居る。或は盜をしないと盜むことから起る、總ての恐怖や良心の苛責や法罰からして一つの解脱をして居る。若し聊かでも盜むと云ふことがあつたらば、其事が露れた時には何うなるかと云ふことを思ふ。それでは解脱ではない。實に苦しい。露れた時も苦しいが露れない時でも苦みを受ける。かゝる理由に依て戒法を護ることは總ての點に於て一々解脱して行くのです。それであるから方便其ものが究竟になつて居るのであります。佛とは何だと云へば慈悲の心其者である。佛心とは何だと云へば覺ると云ふことであつて、即ち眞の如くに解つて居ることである。分らずに慈悲をするのではない。であるから慈悲と智慧と圓滿な者を佛と云ひ、其慈悲と智慧の兩つが行に現れて居るのが方便である。そこで佛行でないものは決して究竟の方便とは云へない。そこで佛行でない事を教ふる者があれば、それは佛教ではない、魔法である。方法は何うでも目的を達すれば宜いと云ふことは決して佛教では許さない。方法其者が佛行でなければ究竟の目的は達せられぬものであると云ふことに定まつて居る（未完）

在大連ドクトル上田恭輔氏よりの書信の一節

元來東洋古今獨特の文藝は我々日本人の手によりて世界に紹介せざるべからず又我々日本人の天職なりとは迂生年來の抱負と自論にて候にも不拘時々刻々各般の事に亘つて毛唐に先鞭を付けられ頗る不満に存居候際佛典の研究の如きは是非とも邦人の獨專物に致したきものと存候……過般當地某學會の希望を容れて支那陶器の研究を薦むしと題して學術的に古代の瀬戸物を研究せん、とを話題として一場の講話を試み候原稿御手許に差出可申候